

研究ノート

## 看護基礎教育の技術演習における 学生のリフレクションに関する国内文献の検討

高橋幸子<sup>1</sup> 嘉手苺英子<sup>2</sup>

### I. はじめに

近年、専門職者の能力を高めることにおいて、リフレクションによる学びが注目されている。わが国の看護学領域においても、2000年頃よりリフレクションに関する実践報告や研究報告が散見されるようになった(藤井・田村, 2008)。リフレクションは、実践からの学びを明らかにするために経験を振り返るプロセスであり(Reid, B, 1993)、その自己教育的な意義から、臨床での新人教育・継続教育に広く取り入れられている。看護基礎教育においても、リフレクションを取り入れた報告が多数されており(松永・前田, 2013;野口ら, 2012;粕谷・遠藤, 2010;西村ら, 2002)、学生の看護実践能力を育成する方法のひとつとして関心が高まっている。

看護基礎教育において学生の看護実践能力を育成する主要な学習内容として、看護技術がある。学生は、臨地実習で対象者へ看護を展開する前に、学内の技術演習において看護的なものの見方とその表現技術について学ぶ。看護基礎教育での学生のリフレクションを取り扱っている研究を概観すると、その多くは臨地実習のリフレクションであり、技術演習での学生のリフレクションに関する研究は限られている。しかし、学内での技術演習には、看護の初学者である学生が、実習に先立ち看護の概念を形成し看護実践能力を身につけることを目指した学習プロセスがある。技術演習において、学生がどの

ような経験をし、その経験をどのように振り返り、どのような学びを得ているのか、学生のリフレクションの様相を追究することは、看護基礎教育における看護実践能力の育成に示唆を与えるものと思われる。

そこで、本論文では、看護基礎教育の技術演習における学生のリフレクションに関する日本国内の文献を概観し、どのような技術演習を行い、どのような方法でその経験を振り返り、どのように意味づけて学びを得ているのかを、看護技術の修得過程という観点から明らかにし、看護基礎教育の技術演習における学生のリフレクションに関する研究課題を探ることを目的とする。

### II. 用語の定義

#### 1. リフレクション

リフレクションは、経験により引き起こされた気にかかる問題に対する内的な吟味および探究の過程であり、自己に対する意味づけを行ったり、意味を明らかにするものであり、結果として概念的な見方に対する変化をもたらす。

#### 2. 看護技術の修得過程

看護技術の修得とは、その時々における対象の構造を見抜きながら、対象と看護者と立場を変換しつつ、具体的行為のポイントを押さえ、安全・安楽・自立を目指した目的意識的な行為ができることである。看護技術の修得過程は、自身の看護技術修得について自己評価することで課題を明らかにしながら学んでいく過程である。

<sup>1</sup> 沖縄県立看護大学大学院博士後期課程

<sup>2</sup> 沖縄県立看護大学

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 文献の抽出と選定

文献検索は、国内最大の医学看護学文献情報データベースである医学中央雑誌Web版ver.5を用いて、キーワード「リフレクション／振り返り／省察／反省／内省」「技術」「看護基礎教育／看護学生／看護教育」をかけあわせ、2014年8月に検索した。今回は看護基礎教育の技術演習における学生のリフレクションについて検討するため、検索でヒットした222件の文献のタイトルと抄録を読み、現任教育に関する文献53件、臨地実習に関する文献49件、教育方法の評価をしている文献35件、その他、医療安全の演習や教員のリフレクションを取り扱っているもの、助産師教育を取り扱っているものなど43件を除外した。除外後の42件の内容を精読し、リフレクションを構成する要素のうち、リフレクションのもととなる演習内容、リフレクションの方法・内容が読み取れないものは除外した結果、17件の文献が抽出された。さらに、引用文献や著者名により抽出された68件のうち、上記選定基準を満たした2件の文献を加え、総計19件を分析対象とした。

#### 2. 分析方法

まず、看護基礎教育における技術演習の学生のリフレクションに関する文献を概観するために、発行年の新しいのものから降順に文献番号をつけ、著者及び発行年、タイトルと掲載誌情報、研究目的、研究対象（教育機関・学年・人数）、研究方法について一覧にした。次に、各文献の技術演習で取り扱っている技術項目、演習方法・内容および学生のリフレクションを把握する方法を整理した。そして、文献中の学生のリフレクションの内容を示す記述のうち、看護技術の修得過程に関連するものを選び、その内容を看護技術修得過程においてどのような意味をもつかという観点で類別した。類別したま

まりごとの内容を抽象化し、《サブカテゴリー》を抽出し、《サブカテゴリー》の類似性に着目し、【カテゴリー】を抽出した。

### Ⅳ. 結果

分析対象となった19件の文献の概要を述べる。なお、( )の数字は、表1に提示した文献番号を示す。

#### 1. 分析対象文献の概要（表1）

分析対象となった19件の文献は、いずれも2000年以降に発表されたものであった。リフレクションという言葉がタイトルに入っているものは1件(18)であったが、その他の文献の本文中には、技術演習後に学生が自己の体験を振り返り、体験を意味づけ学びを得ていることを表す記述があり、リフレクションの要素を含んでいた。分析対象文献の研究目的は、技術演習における学生の学びを明らかにすること、教員の効果的な支援を考察すること、演習の方法や意義を検討することなど多様であったが、どの文献も研究目的を達成するプロセスにおいて、技術演習後の学生のリフレクションの内容を検討していた。全ての文献が、記述内容を分析する質的研究の手法をとっており、演習後に学生が記述した振り返りレポートや記録用紙の記述内容を分析したもの(15件：1・2・3・5・7～17)、面接調査を行い得られた逐語録を分析したもの(3件：4・6・18)、演習記録の記述内容の分析と面接調査を併用したもの(1件：19)があった。面接調査を用いた文献のうち3件(6・18・19)は、演習時に録画したビデオ映像を対象者と視聴しながらインタビューを行う再生刺激法が使われていた。対象となった教育機関は4年制大学(12件)・短期大学(4件)・専門学校(3件)であった。学年は、初学年から最終学年に及び、4年制大学の2年生を対象としたものが最も多く、8件であった。

沖縄県立看護大学紀要第16号 (2015年3月)

表1 分析対象文献の概要

文献番号	著者(発行年)	タイトル、掲載誌情報	研究目的	研究対象(教育機関・学年・人数)	研究方法
1	山本ら(2012)	排泄援助技術実践報告(第2報)、旭川荘研究年報43(1), 31-36.	排泄援助技術の授業にグループワーク・技術発表を導入して取り組み学生の振り返りの内容を分析し、学習内容を明らかにする。	看護専門学校・1年次・98名	振り返りレポートの内容を分析
2	小澤ら(2012)	急性期における成人看護学演習の効果シミュレーション教育を試みて、愛知きわみ看護短期大学紀要, 8, 1-5.	急性期の成人看護学演習において、シミュレーション教育を試み、学生の学びを明確にする。	短期大学・2年生・67名	講義終了後のレポート(自由記載)の記述を分析
3	須田ら(2011)	学生が技術練習後に記載する振り返り用紙から見えてきたこと 看護技術を効果的に習得していくための教員の関わりとは神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 7, 1-6.	清拭の看護技術習得に向けた学生の自己練習について検討し、教員の効果的な支援を考察する。	看護専門学校・1年生・9名	毎回の自己練習後、記述した振り返り用紙の内容を分析
4	水戸ら(2011)	模擬患者を用いた看護技術演習における看護学生の「想定外」の経験, 神奈川県立保健福祉大学誌, 8(1), 73-79.	模擬患者を用いた看護技術の演習プログラムで「想定外」の状況に直面した学生の思考・行動パターンを捉えると共に、模擬患者を用いた看護技術演習をより効果的にするための方略を検討する。	4年制大学・2年生・35名	半構成的面接を行い、逐語録を質的帰納的に分析
5	細矢ら(2009)	導尿演習で看護師・患者役割体験の順序と学習内容に関する一考察 演習後レポートの内容分析から、つくば国際大学研究紀要, 15, 181-195.	基礎看護技術における導尿の演習で、看護師と患者の役割体験の順序と学習内容の関連について検討する。	4年制大学・1年生・57名	演習後のレポートを分析
6	神原(2009)	看護技術の練習場面における学習過程の分析 再生刺激法による学生自身の振り返りから、目白大学健康科学研究, 2, 37-47.	学生の看護技術の練習場面における学習経験を明らかにし、看護技術教育における練習の位置づけを検討する資料を得る。	4年制大学・2年生・3名	練習場面をビデオ撮影し、ビデオを視聴しながらインタビューした結果をKJ法で分析
7	山本ら(2009)	成人看護援助論1(1)の学内演習における学生の学びと課題, 京都市立看護短期大学紀要, 34, 109-117.	成人看護援助論1(1)の学内演習(両手術期看護)における学生の学びを明らかにする。	短期大学・2年生・52名	グループワーク、および演習の振り返り内容を分析
8	庄村ら(2009)	成人看護学におけるOSCE(Objective Structured Clinical Examination)を活用した看護技術の主体的習得に関する学び, 東海大学健康科学部紀要, 14, 39-45.	成人看護学領域の慢性看護論で実施しているOSCEの学習課程における、看護実践能力および実践能力の主体的習得状況などに関する学生が認識した目標達成や課題を含む包括的な学びについて明らかにする。	4年制大学・3年生・74名	自由記述によるアンケート調査を行い、内容を分析
9	榎本ら(2009)	看護実践能力の向上を目指した成人看護実習直前技術演習の検討(第3報) ビデオを取り入れた振り返りによる学生の学び, 千葉県立衛生短期大学紀要, 27巻1-2 135-142	成人看護学実習の実習直前技術演習のビデオを振り返り、得られた学生の学びについて検討する。	短期大学・3年生・74名	実技点検終了後に学生が提出したレポートの分析
10	浅井ら(2009)	看護実践力の向上を目指した成人看護実習直前技術演習の検討(第1報) 病床での看護場面を想定した実技点検, 千葉県立衛生短期大学紀要, 27(1-2), 117-124.	成人看護学実習の実技点検の目的達成状況を、演習への学生の意見・感想から振り返り、演習方法の改善を試みる。	短期大学・3年生・76名	実技点検終了時に振り返りシートとして学生が記載した「演習についての意見・感想」の記述内容を分析
11	南ら(2008)	静脈血採血実習における看護学生の学びの分析, 香川大学看護学雑誌, 12(1), 37-46.	学生同士で患者-看護師役割を取り、実際に静脈血採血を行う実習が、学生にとって、採血実習がどのような体験となっているか明らかにする。	4年制大学・2年生・55名	実習後に提出された「実習からの学び」に関するレポートの記述内容を、帰納的に分類
12	荻原ら(2008)	急性期看護学演習における学生の学び「創傷包帯交換」技術演習を通して、看護人材教育, 5(3), 129-134.	看護大学の看護技術演習において、学生がグループで、看護師・医師・患者役という全ての役をロールプレイングで体験することによってどのような学びがあるのか、学生の自己評価と振り返りを分析する。	4年制大学・2年生・105名	学生の自己評価と振り返り記録を分析
13	花井(2007)	盲体験後のレポートにみる「振り返り」の構造, 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 11, 36-45.	盲体験及びその介助者体験の振り返りレポートから振り返りの構造を明らかにし、看護技術修得の初期段階における体験の意味を考察する。	看護専門学校・1年生・12名	演習後に提出したレポートの内容を分析
14	平木ら(2007)	模擬患者を対象にした学生の看護技術の分析 ビデオ画像と振り返り内容の分析を通して、香川県立保健医療大学紀要, 3, 61-69.	看護技術演習の自己評価と演習後の振り返り内容を明らかにする。	4年制大学・2年生・69名	演習場面のビデオ撮影をもとにした評価と、演習後自由記述した振り返りの内容を分析
15	澁谷ら(2007)	ベッドメイキング演習における学生の学びの様相-〈実践知〉獲得への扉を開く-	看護技術“ベッドメイキング演習”における学生の学びの様相を質的に記述し、その学びを可能にする教師の教育活動と“ベッドメイキング演習”の技術教育としての意義について検討する。	4年制大学・1年生・49名	演習後のレポートを分析
16	高橋ら(2005)	精神看護場面のロールプレイング演習にビデオの振り返りを取り入れた学び, 岐阜県立看護大学紀要, 5(1), 41-46.	精神看護場面のロールプレイング演習にビデオによる振り返りを取り入れた学習の効果を明らかにする。	4年制大学・3年生78名	レポートの記述内容を分析
17	田村ら(2004)	科目「看護援助技術演習」における3つの教授-学習方法の導入-ピアリーダーシップ・リフレクティブジャーナル・チューター制-, 日本看護学教育学会誌, 14(1), 2004.	3つの教授-学習方法の実際を紹介するとともに、それらの効果についての一考察を試みる。	4年制大学・2年生72名	演習後に記述したりフレクティブジャーナルの記述内容を分析
18	渋谷(2001)	看護技術学習における学生の意味構成を支えるリフレクション, Quality Nursing, 7(8), 13-26.	看護技術学習において筆者が実際に関わった演習場面において、学生がどのように他の学生および教師と社会的相互作用を行い、その中でどのようにリフレクションを通して学習の意味構成を行っていくのかに焦点を当て、教育実践における意義を述べる。	4年制大学・2年生4名	演習場面の録画ビデオを用いた面接調査(再生刺激法)
19	池西(2001)	看護学生の知識と行動の統合に向けての反省的思考に関する研究-実感的自信につながる学習過程-, Quality Nursing, 7(8), 27-32.	看護技術の学習において反省的思考による問題解決過程においてどのような行動の変化が見られるのか、その実態を分析する。	4年制大学・2年生・10名	演習記録と演習場面の録画ビデオを用いた面接調査(再生刺激法)

## 2. 技術演習の項目および演習方法・内容、学生のリフレクションを把握する方法（表2）

技術演習で取り扱われた技術項目は、ベッドメイキングなど環境を整える技術、コミュニケーション技術、血圧測定などの観察技術、おむつ交換や導尿などの排泄援助技術、洗髪・清拭などの清潔援助技術、片麻痺患者の車椅子移乗などの移動援助技術、与薬技術、創傷処置技術、採血技術、術前訓練などの周手術期の看護技術と多岐に渡っていた。

演習方法は、客観的臨床試験（OSCE: Objective Structured Clinical Examination）や技術チェックなど、学生が看護者として技術を実施し教員の評価を受ける方法（5件：4・8・9・10・14）と、学生が看護者・患者の両方を体験し学生同士で演習する方法（14件：上記以外）とに大きく分けられた。学生同士で演習する方法の中には、技術発表（1）やシミュレーション教育（2）など、他の学生が見学する状況で看護者として技術を実施しているものもあった。3件（3・5・6）を除き、学生は、技術実施後、教員からのフィードバックを受けたり（3件：2・4・8）、ビデオに録画した自己の映像を視聴したり（1件：14）、看護者役の学生・患者役の学生・観察していた学生とで意見交換したり（7件：7・11・15・17・18・19）、これらを併用したり（教員のフィードバックと学生同士の意見交換：1、教員のフィードバックとビデオ視聴：9・10、ビデオ視聴と意見交換：16）することで、行った看護技術を客観的な視点から学生が捉えられるような方策が、演習内容に含まれていた。

学生のリフレクションを把握する方法として、振り返りレポートや記録用紙を用いる方法と、面接調査と、両方を併用する方法とがあった。これらの方法で学生にリフレクションを促す時に、「ビデオを視聴しながらその時に考えていたこと」（6）「良かった点・改善すべき点・気

をつけなければならぬ点」（7）、「自分にとってとても意外だったこと」（15）といったように、研究者が振り返る時点や観点を指定しているものと、「感じ考えたこと」など学生の自由な観点で振り返らせているものがあった。

## 3. 看護技術の修得過程における学生のリフレクション

対象文献に記述されていた学生のリフレクションの内容を、看護技術の修得過程という観点で検討した結果、【自己客観視】【看護技術のポイント】【患者の立場からの技術の理解】【学習プロセス】の合計4つのカテゴリーにまとめられた。カテゴリーならびにサブカテゴリー、サブカテゴリーごとに学生のリフレクションの内容を示す代表的な記述を抜粋し、表3に示した。以下に、各カテゴリーについて、構成する《サブカテゴリー》と学生のリフレクションを示す記述を提示し説明する。

### 1) 【自己客観視】

リフレクションにおいて学生は、技術実施時の自身の緊張状態を自覚し、「何も考えられなくなり、冷静さが失われる」とパフォーマンスが鈍ることや「こちらの緊張が患者に伝わっている」と対象者への影響に気づくなど、《実施時の緊張とその影響を自覚》していた。また、ビデオの録画映像で自身の技術実施状況を視聴した学生は、「自分の無意識な癖などを見つけることができた」と《行動の客観視》をしていた。

その他、ベッドメイキングの演習において、患者の安全を守るために必要と思って選択した方法が患者体験をしてみると不快に感じたことから、自己中心から患者中心へ視点が転換していたり、清拭の演習場面を振り返り羞恥心を感じた原因は療養者役の学生を友人と捉えたためと認識し、自身に看護者として問題を捉える視

表2 技術項目および演習方法・内容、学生のリフレクションを把握する方法

文献番号	技術項目	演習方法・内容	学生のリフレクションを把握する方法
1	排泄援助技術 (おむつ交換)	・1グループあたり4~5人のグループに分かれる・各グループで事例に対する援助を考え、患者役・看護師役・説明役を決め、技術を発表する・発表後、会場から質問や意見交換を行う・終了後、教員から全体へフィードバック	演習後の学生の振り返り記録
2	周手術期の看護 ・術前呼吸訓練 ・術後創部の観察	・シミュレーション教育 (事前に看護計画を立案、2つのシナリオについて、看護師役と患者役をそれぞれ1人10分間で実施し、患者役と教員からフィードバックを受ける)	学生が看護師役として記述した振り返りレポート
3	清拭	・清拭の技術試験に向けて自己練習する・自己練習の心得として、①テキストを読む②練習する③研究する④情報交換する⑤患者に関心を向けることを教授した。	自己練習ごとに学生が記述した振り返り用紙
4	車椅子移乗	・事前学習 (事例理解のグループワーク、援助計画立案)、学生間で練習・模擬患者養成機関に所属している高齢男性に対して実施、評価者がチェックリストを用いて看護技術の評価を行う・実施後に、模擬患者と評価者からフィードバック	「学びの振り返り」について行った半構成的面接
5	導尿	・教員によるデモンストレーション・全員が看護師・患者役割を体験	演習後のレポート (看護師・患者役割それぞれを実施した結果についての自由記述など)
6	ベッドメイキング	・練習相手を探して、自己練習を行う・練習相手が見つからない場合は、ひとりで行う	練習場を録画したビデオを視聴しながらそのときに考えていたことや思った事をインタビュー (再生刺激法)
7	周手術期の看護・術前オリエンテーション、術前訓練・術後創傷処置、ドレーンチューブの管理、心電図モニター	・周手術期の看護についてグループワーク・術前・術後の看護演習を実施・各演習終了後に学生間で意見交換 (実施して良かった点・改善すべき点)	レポート ①患者役・看護師の体験を通して感じたこと ②よかった点・改善すべき点・気をつけなければならない点
8	・輸液管理・簡易血糖測定・インスリン注射・経口与薬	・約1ヶ月間、学生は教員のオフィシアワー、自己評価、ピア評価を繰り返し、練習・OSCE当日、くじ引きをして4技術のうちの1技術を実施する。時間は10分。 ・試験後、患者役をした4年生と教員からフィードバック	・A4版用紙約1枚に、以下を自由に記載①OSCEを通して学生が経験したことの学生自身の意味づけ②学びや課題、反省等の自分自身の思いや受け止め③周囲の学生や教員とのやり取りに関する思いや受け止め
9	・包帯交換介助・寝衣交換	・2ヶ月半前に課題を提示し、学生は自主練習を行う ・実技点検 (OSCE)直後、学生の自己評価、患者役の教員、評価者の教員からの評価を行う ・学生全員の実技点検が終了した後、学生全員に対し教員が講評を行う ・その後学生は、実技のみに編集されたビデオを視聴し、実技チェック表にて自己評価する ・さらにその後、教員が評価した実技チェック表を返却され、学生は自己評価と照合する	各自の実技をビデオ視聴しながら実技チェック表をチェックした後、「ビデオを見てどのように思いましたか (わかったこと、思ったことなど)」の項目のアンケートを記載してもらう
10	・包帯交換介助・寝衣交換	・2ヶ月半前に課題を提示し、学生は自主練習を行う ・実技点検 (OSCE)直後、学生の自己評価、患者役の教員、評価者の教員からの評価を行う ・実技点検終了後、学生は振り返りシートを記入する ・学生全員の実技点検が終了した後、学生全員に対し教員が総評を行う ・その後学生は、教員が評価した実技チェック表を返却される。演習時のビデオの視聴は任意	・実技点検終了時に振り返りシートとして学生が記載した「演習についての意見・感想」の記述内容を分析
11	採血	・採血の講義終了後、血管モデルによる学内演習を実施し、約2週間の課題練習期間を設ける。この課外練習期間中に、教員による採血技術チェックに合格すること、患者・看護師の両者の役割を取ることが学生間採血の条件と説明する。・実習前日に、グループ担当教員による個別指導を実施する。・学生間で看護師役・患者役をして採血を実施する。	・演習終了から1週間後に提出された「採血実習からの学び」に関する自由記述のレポートの記述内容を分析
12	創傷包帯交換	・看護師・医師・患者役をロールプレイング	・演習終了後、13項目4段階で自己評価を行った結果と、自由記述の「患者役を行った感想」「医師役を行った感想」の振り返り
13	盲体験 (コミュニケーション技術)	・介助者役がアイマスクをした患者役を介助して屋外に出て校舎の周りを散歩させる。往路と復路で体験を交替する。 ・ペアの相手と意見交換 (介助が看護技術になっていたかという視点で考える)	体験後「介助者体験と患者体験の中で発見したこと」のレポート
14	・車椅子移乗・血圧測定	・患者情報は10日前に、課題は実施直前に提示する。・教員1名、模擬患者1名、学生7名を1グループとして、グループ別に実施 ・技術演習場をビデオ録画した映像を視聴しながら自己評価表をチェックする。	・自己評価表の備考欄の「振り返り (実施した看護技術で不満足であったり失敗したと感じた要因や今後の課題)」の自由記載
15	ベッドメイキング	・デモンストレーション・病室環境のポイントを考える事前課題 ・1グループ (3~4人) で1台のベッドを作成 ・カンファレンス (演習中に気づいたこと)	演習後、「基本ベッドを作成してみて、自分にとってとても意外だったこと、へえと思ったことなどをその時の状況を再現するように記述してみよう! また、そのように思った理由も合わせて書いてみよう!」という課題レポート
16	コミュニケーション技術	・ロールプレイ ・患者役・看護師役・観察者役・撮影者を順にロールプレイ ・演者と観察者らと意見交換 ・ロールプレイのビデオ視聴とグループでの意見交換	演習後、「自分の行動をビデオでみて、感じたこと、考えたこと」についてレポートを記述する
17	洗髪	・教師によるデモンストレーション ・学生によるグループメンバーへのコーチング ・カンファレンス	リフレクティブジャーナル ①なぜその場面・状況を選択したのか? ②その場面・状況を何をしようとして起こったのか? ③その時の感情はどのようなものであったのか? ④その時の判断や自分の取った言動はどうだったか? ⑤その場面・状況に必要な知識やスキルはどのようなことか?
18	洗髪	・療養者役と援助者役および観察者役いずれかの役割を持ち、演習を行う ・演習後、グループメンバーとディスカッション	インタビュー (再生刺激法)
19	清拭	・学生同士で看護師役・患者役を決めて演習 ・演習後グループメンバーとディスカッション	演習記録用紙とインタビュー (再生刺激法)

表3 看護技術の修得過程における学生のリフレクション

カテゴリー	サブカテゴリー	学生のリフレクションの内容を示す記述（一部抜粋）	文献番号	
自己客観視	実施時の緊張とその影響を自覚	・想定外の状況に直面したときの心情を「焦りを感じた」「困惑した」と表現した者が多数を占めた。	4	
		【自分の動き】「すごく慌てていた。こちらの緊張が患者に伝わっていると感じた」	9	
		【緊張感・その影響や対策】「自分が緊張しやすいこと、緊張すると手だけが動いて頭の中では何も考えられなくなり、冷静さが失われることに気づいた」	10	
		【採血実習に対する不安・緊張・恐怖】「人間に刺入することへの緊張や恐怖心があった」	11	
		【緊張】「あせてあふたした」「緊張してできていたことまでできなくなった」	14	
	行動の客観視	【自分の言動への気づき】「自分の無意識の癖などを見つけることができた」	9	
		【自分の言動への気づき】「改めて会話が一方的だと思った」	16	
	看護者としての視点	【自己中心から患者中心へ視点が転換する】「転落を防止するために柵をつけてベッドを低くしていたが、実際に寝てみると周囲の人が自分を見下しているような圧迫感を感じた」	15	
		・学生は、療養者役を友人と捉えたために目のやり場に困ったと認識でき、自分には看護者として問題を捉えるという視点がないことに気づき、問題の捉え方を再構成した。	19	
	看護技術のポイント	技術の難しさ	【看護技術の難しさ】「呼吸訓練の指導が難しい」「フィジカルアセスメントの難しさ」	2
【温度管理の難しさ】「お湯が腹部を拭き終わる前に冷めてしまった」			3	
【カテーテル挿入について】「思っていた以上にカテーテルを挿入するのに苦労した」			5	
【採血技術の困難点】「刺入した針の長さの見極めが難しかった」			11	
技術のポイントの明確化		【効果的な身体の拭き方】「タオルが当たる面を広い面になるようタオルの向きを考える」【スムーズな寝衣交換】「向かい袖で腕を足側に少し下げてから行うと簡単」	3	
患者の立場からの技術の理解	患者への配慮不足の自覚	【援助場面での配慮】「他のグループで排泄の後に手ぬぐいを渡して、対象者の立場になって考えないといけないと思った」	1	
		【患者の反応からの気づき】「私がジャマを引くことで、患者の体があんなにゆれるのかとはじめて気づいた」	9	
	患者の思いを追体験	【患者や家族の思い】「目が覚めたとき、酸素マスク、カテーテルなどにつながれて驚き、恐怖、拘束などを感じると思う」	7	
		・多くの学生は患者役を通して、「肌の露出」による羞恥心や、「処置中の冷感への驚き」を感じていた。	12	
		【盲状態に伴う自己の感情の揺らぎ】「見えない恐怖や不安」「周囲の音に敏感になる」	13	
	患者の立場から技術の意味をとらえる	【患者の状態を考えた技術】「麻痺側に立つて行う事で、患者さんの倒れるのではないかと心配が少し減るということがわかった」	9	
		【患者に苦痛・不安を与える態度・言動・技術への気づき】「少しの針の動きで痛みを感じることを実感した」「痛い思いを体験して講義内容の注意事項を守る必要性を理解できた」	14	
	「ある程度、力を入れて洗ってもらった方が気持ちよかったです、力の入れ具合も大切だと思った」	17		
	学習プロセス	練習の必要性を実感	【自己の振り返り】「前期に勉強していた知識を忘れていた部分が多かったので、しっかり復習したい」	5
			【さらに練習する】「練習して自信が持てれば頭が真っ白になったりしない」	6
【練習・冷静】「もっと練習する」「もっと冷静になる」			14	
学生同士で意見交換することの意義		【認識の違い】「相手が良かれと思ってくれたところが自分は恐怖、相手に伝えてわかり合えた」	13	
【協力し思考することの価値に気づく】「グループメンバーの一人が、頭側に柵をつけると、患者さんが横になったとき、圧迫感があって、牢屋にいるような気持ちになるかもしれないから、足側につけた方がよいと思うと言ったとき、そうか、と頭に電流が走った」		15		
練習と実践のギャップ		「練習の時には、患者が起き上がるころまでは自分でできる設定だったが、実際はそうではなかった」「練習の時には通じていた説明が、患者には伝わらなかった」	4	
		【不安になった】「演習の時の状態では、患者の前に出て緊張で固まってしまうのではないかと不安」	10	
学習意欲の向上		【練習や試験での反省や悔しさから技術や態度を高める動機づけの獲得】	8	
		・試験後の評価における教員と患者役からの肯定的なフィードバックによる自信や自己効力感の高まり	9	
		【自己成長を実感する成功体験】「自信へとつながった」「自己成長へとつながった」	11	
	【看護技術を学ぶ意欲が高まる】「(ベッドのしわをなくすのは)美しくだけではなく、そこにはちゃんと根拠がある。自分の思っている以上に奥が深い。難しさを感じたし、同時にもっと学びたい気持ちになった」	15		

\* 【 】は文献におけるカテゴリ、「 」は具体的内容例、・は本文中の表現

点がなかったことを自覚し、捉え方を修正していたりした。これらは、目に見える行動だけでなく、自身の《看護の視点》について客観視した結果、視点の変化が生じていた。このように看護の視点の変化を伴うリフレクションは、看護の概念の形成を目指す看護技術の修得過程において、意義あるリフレクションと捉えられた。

以上、技術実施後に、実施時の自身の感情や行動や視点を客観視していた学生のリフレクションは、【自己客観視】の категорияとしてまとめた。

## 2) 【看護技術のポイント】

学生は、我が身を通して看護技術を実施することで「思っていた以上にカテーテルを挿入するのに苦労した」と《技術の難しさ》を自覚していた。一方、寝衣交換を実際にやることで「向かい袖で腕を足側に少し下げながら行くと簡単」とポイントがより具体的になり、《技術のポイントが明確》になっていた学生もいた。

以上、技術実施後に、実施した看護技術のポイントに対する学生のリフレクションは、【看護技術のポイント】の categoriaとしてまとめた。

## 3) 【患者の立場からの技術の理解】

学生は、他のグループが患者の不快を取り除くケアを実施しているのを見たり、自身の実技のビデオ映像を視聴することで、《患者への配慮不足の自覚》をしていた。また、全盲で歩行介助される患者体験や創傷処置を受ける患者役をすることにより、学生は、《患者の思いを追体験》し、患者の理解を深めていた。さらに、採血の患者体験について「少しの針の動きで痛みを感じることを実感した」と振り返り、針を刺入した後は針先を動かさないよう固定する、と《患者の立場から技術の意味をとらえ》ていた学生もいた。

以上、演習後に、看護技術を受ける患者の気持ちを感じ取ることで患者の立場から看護技術の理解を深めていた学生のリフレクションは、【患者の立場からの技術の理解】の categoriaとしてまとめた。

## 4) 【学習プロセス】

学生は、技術試験で力が発揮できなかったことから《練習の必要性を実感》していた。そして、学生同士で意見交換することで認識の違いに気づいたり、自分になかった視点に気づかされたりして、《学生同士で意見交換することの意義》を感じていた。一方で、学生同士で練習していた時と試験時の患者の反応が異なったことから、《練習と実践のギャップ》を感じていた学生もいた。また、教員から肯定的なフィードバックをもらうことや、侵襲性が高くストレスの大きい看護技術を成功した体験が自信となりモチベーションを高めたり、日常的な看護技術の小さな行為にも根拠があることを知った体験から、看護技術の奥深さや難しさを実感し、《学習意欲が向上》していた学生もいた。

以上、技術演習後に、これまでの学習体験を想起したり、今後の学習に対して意欲をもったりしていた学生のリフレクションは【学習プロセス】の categoriaとしてまとめた。

## V. 考察

これまで、看護基礎教育の技術演習における学生のリフレクションに関して、振り返るものとなる演習方法・内容、リフレクションを把握する方法、そしてリフレクションの内容について、それぞれ述べてきた。考察では、リフレクションの内容と演習方法・内容、およびリフレクションを把握する方法とリフレクションの内容の関係について、看護技術の修得過程という観点から検討し、今後の研究課題について考察する。

## 1. 学生のリフレクションの内容と演習方法・内容との関係について

学生のリフレクション【自己客観視】のもととなる演習方法・内容を見てみると、技術演習後に評価者や患者役からフィードバックを受けていたり、ビデオ映像で自己の実施時の状況を視聴したり、グループメンバーとディスカッションしたりといったように、行った看護技術を客観的に学生が捉えられるような演習内容が含まれていた。看護技術の修得過程は、自身の看護技術修得を自己評価し、課題を明らかにすることですすんでいく。梶田（1985）は、自立的な学習につながる自己評価について、適切な目標水準で評価されていることと、客観的な実態把握に基づくことを必要条件として提示した。初学者である看護学生は、行った看護技術を評価をするときの適切な目標水準、つまり看護の評価の視点も学習途上である。また、技術実施時には自身の行動に集中する傾向にあり、その実技をリフレクションする時にも、学生が気になった現象に注目しがちである。同じ技術実施場面にいた評価者や患者からのフィードバック、グループメンバーの意見や録画した映像は、学生が実技場面を客観的に実態把握するのを助ける。教員など評価者のフィードバックは、看護の評価の視点をもつ評価者が、実技場面を評価した結果を伝えることで、看護技術を評価するときの適切な目標水準を示している。以上から、技術実施後に、自身を客観視させ、評価者の評価をフィードバックする演習内容は、自立的な学習につながる自己評価を学生に促し、看護技術の修得過程を促進していることが示唆された。

学生のリフレクション【看護技術のポイント】のもととなる技術演習の方法・内容では、学生同士で看護者役・患者役となり行う演習方法が多かった。また、学生のリフレクション【患者の立場からの技術の理解】のもととなる技術演習の方法・内容は、学生が患者役をした

体験を振り返っているもの、実技後に録画した自己のビデオを視聴したもの、他のグループの実技を見学したものがあつた。このように、演習方法・内容は多様であつたが、リフレクションを通して、技術のポイントを明確にしたり、患者の立場から技術を捉えたり、看護技術の修得がすすんでいるように思われた。このことから、技術演習後のリフレクションのあり方が看護技術修得に影響すると捉えられ、リフレクションそのものの力を高めることが、看護技術の修得過程を促進すると考えられた。田村ら（2008）は、リフレクションについて、トレーニングすれば身につけることができる思考のスキルととらえ、リフレクションを教育実践に活用し、報告している。田村らは主に臨地実習での実践を報告しているが、学内の技術演習の場でも同様に、リフレクションを活用することの教育効果を検討する意義があると思われた。

学生のリフレクション【学習プロセス】のもととなる技術演習の方法・内容は、学生同士の意見交換で自分とは違う意見を聞き視野が広がった体験や、練習時の状況と試験時のギャップに直面した体験など、自分が描いていたイメージを覆され、感情が揺さぶられた体験をしていた。このように、感情が揺さぶられた体験は、練習の必要性の自覚や学習意欲に影響することが示唆された。

## 2. リフレクションを把握する方法とリフレクションの内容との関係について

リフレクションは、経験により引き起こされた気にかかる問題に対する内的な吟味および探究の過程である。そのため、他者が把握するには、何らかの形で表現してもらう必要がある。今回の対象文献において、学生のリフレクションを把握するために使われていたレポートや面接調査は、学生の認識内部で行われた内的な吟味や探究の過程を、文字や言葉で表現してもら



う方法として捉えられた。また、リフレクションをするときの観点について、学生の自由な観点で振り返らせているものは、学生が技術演習について、どのようなことを気にかけて問題としているか、リフレクションの出発点を浮き彫りにしていると捉えられた。学生のリフレクションの内容との関係を見てみると、学生の自由な観点で振り返らせる方法をとっていたものは、学生のリフレクションの内容【自己客観視】のサブカテゴリー《実施時の緊張とその影響を自覚》や【看護技術のポイント】のサブカテゴリー《技術の難しさ》に多くみられた。このことから、技術演習後、学生は緊張していた自己や技術の難しさを、気にかかる問題としていることが読み取れた。

一方、研究者が振り返る時点や観点を指定したのものには、「良かった点とその理由」や「今後の課題」といったように、学生が看護技術修得について自己評価し、課題を明らかにする観点で振り返るように導いているものがあり、これは、看護技術の修得過程の促進に向けたリフレクションを促しているとして捉えられた。リフレクションの内容との関係を見てみると、研究者がリフレクションの観点を指定しているときの学生のリフレクションの内容には、看護者としての視点が変化し、認識が発展しているものがあった。Burns et al. (2000)は、リフレクションに欠かせない基礎的スキルとして「自己への気づき (self awareness)」「表現 (description)」「批判的分析 (critical analysis)」「総合 (synthesis)」「評価 (evaluation)」を提示し、この連続性が経験学習のサイクルとなると述べた。看護の視点が変化した学生のリフレクションの記述内容には、清拭時に目のやり場に困った「自己への気づき」があり、その場面を研究者と演習時のビデオ映像を視聴しながら事実的に振り返って「表現」し、「批判的に分析」したところ、療養者役を友人と捉えたために目のやり場に困って

いたと「総合」され、自分に看護者として問題を捉える視点がなかったと「評価」しており、リフレクションのサイクルをたどることで、看護者としての認識が発展していることが読み取れた。このリフレクションのサイクルを辿れるよう意図された記録用紙としてリフレクティブジャーナルを開発し、実習記録など看護基礎教育の場で活用した結果、教育的効果があったことが報告されている (中田ら, 2004; 中田ら, 2005)。以上から、学生の看護の視点が変化し、看護者としての認識が発展する時には、リフレクションのサイクルを辿っていることが示唆された。

## VI. まとめ

看護基礎教育の技術演習における学生のリフレクションは、演習内容に含まれている実技場面を客観視する体験を経て行われていた。また、学生のリフレクションの内容は、リフレクションを促す方法の影響を受けていた。そして、学内の技術演習という模擬看護場面であっても、リフレクションを通して学生が看護の概念を形成し、看護者としての認識を発展させてゆく様子が垣間見られた。以上をふまえ、技術演習において看護者としての認識の発展につながるリフレクションを促す方法について明らかにすることが、今後の研究課題として見いだされた。

## VII. 本研究の意義と限界

本研究では、看護基礎教育の学内の技術演習において、学生のリフレクションの内容を、演習方法・内容とリフレクションを把握する方法との関係において提示したこと、また、リフレクションを通して看護の概念の形成につながる視点の変化が起こっていることを、文献の中のデータをもとに示したことに意義がある。しかし、分析した学生のリフレクションは、各文献の研究目的に対して収集されたデータを取り

扱っているため、学生のリフレクションの全体像を把握できていない点に限界がある。

### <引用・分析対象文献>

浅井美千代, 榎本麻里, 三枝香代子, 白鳥孝子, 中井裕子, 川崎由理, 長井栄子. (2009). 看護実践力の向上を目指した成人看護実習直前技術演習の検討 (第1報) 病床での看護場面を想定した実技点検, 千葉県立衛生短期大学紀要, 27 (1-2), 117-124.

Brigid Reid. (1993). 'But we're doing it already!' Exploring a response to the concept to Reflective Practice in order to improve its facilitation, Nurse Education Today, 13, 305-309.

榎本麻里, 浅井美千代, 三枝香代子, 白鳥孝子, 中井裕子, 堀之内若名, 川崎由理. (2009). 看護実践能力の向上を目指した成人看護実習直前技術演習の検討 (第3報) ビデオを取り入れた振り返りによる学生の学び, 千葉県立衛生短期大学紀要, 27 (1-2), 135-142.

藤井さおり, 田村由美. (2008). わが国におけるリフレクション研究の動向, 看護研究, 41 (3), 183-196.

花井節子. (2007). 盲体験後のレポートにみる「振り返り」の構造, 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 11, 36-45.

平木民子, 堀美紀子, 松村千鶴, 雨宮多喜子, 淘江七海子. (2007). 模擬患者を対象にした学生の看護技術の分析 ビデオ画像と振り返り内容の分析を通して, 香川県立保健医療大学紀要, 3, 61-69.

細矢智子, 山崎智代, 佐々木美樹, 小山英子. (2009). 導尿演習で看護師・患者役割体験の順序と学習内容に関する一考察 演習後レポートの内容分析から, つくば国際大学研究紀要, 15, 181-195.

池西悦子. (2001). 看護学生の知識と行動の統合に向けての反省的思考に関する研究—実感的自信につながる学習過程—, Quality Nursing, 7 (8), 675-680.

梶田 叡一. (1985). 自己教育への教育, 明治図書出版, 東京.

神原裕子. (2009). 看護技術の練習場面における学習過程の分析 再生刺激法による学生自身の振り返りから, 目白大学健康科学研究, 2, 37-47.

粕谷恵美子, 遠藤恭子. (2010). 慢性期看護学実習終了後の振り返り学習における学びリフレクションを通して得た知識と実習目的との比較, 足利短期大学研究紀要, 30 (1), 41-46.

松永麻起子, 前田ひとみ. (2013). 臨地実習のリフレクションから導かれた看護学生の気づきと批判的思考態度に関する研究, 日本看護学教育学会誌 23(1), 43-52.

南妙子, 岩本真紀, 粟納由記子, 名越民江. (2008). 静脈血採血実習における看護学生の学びの分析, 香川大学看護学雑誌, 12 (1), 37-46.

水戸優子, 大石朋子, 小山真理子, 間瀬由記, 牧野美幸, 野崎真奈美, 屋宜譜美子. (2011). 模擬患者を用いた看護技術演習における看護学生の「想定外」の経験, 神奈川県立保健福祉大学誌, 8 (1), 73-79.

中田康夫, 田村由美, 澁谷幸, 山本直美, 森下晶代, 石川雄一, 津田紀子. (2005). 基礎看護実習におけるリフレクティブジャーナル上での教師と学生の対話の意義, 神戸大学医学部保健学科紀要, 20, 77-83.

中田康夫, 田村由美, 藤原由佳, 石川雄一, 津田紀子. (2004). <自己への気づき>のスキルを活用してリフレクティブジャーナルを記述した学生の変化, Quality Nursing, 10(5), 485-490.

- 西村はるよ, 生田美苗, 岩本かすみ, 志磨美恵, 近田敬子. (2002). 臨地実習における看護学生のリフレクションの様相, 日本看護学会論文集 看護教育, 32, 209-211.
- 野口佳美, 森本美智子, 谷村千華, 大庭桂子. (2012). 看護学実習におけるリフレクション導入の効果 学生の関心事象の変化による検討, 日本看護学教育学会誌, 22(1), 13-24.
- 荻原麻紀, 尾山とし子, 河原田栄子. (2008). 急性期看護学演習における学生の学び「創傷包帯交換」技術演習を通して, 看護人材教育, 5(3), 129-134.
- 小澤雪絵, 堀田由季佳. (2012). 急性期における成人看護学演習の効果 シミュレーション教育を試みて, 愛知きわみ看護短期大学紀要, 8, 1-5.
- Sarah Burns, Chris Bulman. (2000)/ 田村由美, 中田康夫, 津田紀子. (2005). 看護における反省的实践—専門的プラクティショナーの成長, ゆみる出版, 東京.
- 渋谷美香. (2001). 看護技術学習における学生の意味構成を支えるリフレクション, *Quality Nursing*, 7(8), 661-667.
- 澁谷幸, 山本直美, 三谷理恵, 田村由美. (2008). ベッドメイキング演習における学生の学びの様相 <実践知>獲得への扉を開く, 神戸大学医学部保健学科紀要, 23, 59-78.
- 須田雅美, 田邊三千世, 福田里美, 伊藤幸子, 矢島ちあき, 山本晴美. (2011). 学生が技術練習後に記載する振り返り用紙から見えてきたこと 看護技術を効果的に習得していくための教員の関わりとは, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 7, 1-6.
- 庄村雅子, 佐藤幹代, 高橋奈津子, 佐藤正美, 小島善和. (2009). 成人看護学における OSCE (Objective Structured Clinical Examination) を活用した看護技術の主体的習得に関する学び, 東海大学健康科学部紀要, 14, 39-45.
- 高橋香織, 片岡三佳, 池邊敏子. (2005). 精神看護場面のロールプレイング演習にビデオの振り返りを取り入れた学び, 岐阜県立看護大学紀要, 5(1), 41-46.
- 田村由美. (2008). 看護基礎教育におけるリフレクションの実践, 看護研究, 41(3), 197-208.
- 田村由美, 中田康夫, 澁谷幸, 石川雄一, 津田紀子. (2004). 科目「看護援助技術演習」における3つの教授-学習方法の導入 ピアリーダーシップ・リフレクティブジャーナル・チューター制, 日本看護学教育学会誌, 14(1), 47-56.
- 山本晃代, 山下純子, 都甲裕. (2012). 排泄援助技術実践報告 (第2報), 旭川荘研究年報, 43(1), 31-36.
- 山本多香子, 山田豊子, 三木葉子. (2009). 成人看護援助論 1-(1)の学内演習における学生の学びと課題, 京都市立看護短期大学紀要, 34, 109-117.